# 伊勢物語とあいさつのことば

## ――作中人物の会話を中心に――

上野辰義

一、あいさつ研究の意義と目的

二、散文のあいさつと語りの姿勢

三、散文のあいさつの役割

四、散文のあいさつと歌の関係

五、散文の力と歌の力

《要　旨》

人間関係の構築・維持を目的に交わされるあいさつ表現を分析することで、文学作品における人間関係の分析と作品構築の方法の検討とが可能と思われる。本稿では、伊勢物語の作中人物の発話に見られる散文のあいさつ表現を中心に分析して、その性格と伊勢物語の和歌との関わりを考察する。伊勢物語における章段構成の核はあくまで歌であるが、作中人物の散文のあいさつには歌との関わりを宿命づけられながら、個人の個別的な思考・心情を陳べて歌に対立する内容をもっているものもある。歌に作品の美を集中させながら、本質的には散文作品である伊勢物語の、隠し切れない素顔がそこに見いだせる。

## 一

あいさつは、われわれの日常生活においてごく普通に、かつ普遍的に見られる行動である。それは、人間相互の良好な関係の構築・維持・確認を目的として交わされることばや身振りとして、人との出会いや別れの場のみならず、祝い・見舞い・感謝・詫びなど、社会生活の折り目においても、頻繁に交わされている。その由来は、個体間の接触による緊張を緩和し関係を調整する行動として人間以外の諸動物に求められ、社会を構成し集団で生きる人間においても有史以来の不可欠の行動として、人間相互のコミュニケーションの中で大きな位置を占めてきた。それゆえ、このようなあいさつ行動が、意図したか否かにかかわらず、古来の文献に記し残され、上古以来の文学にも描き出されてきたのには、十分な理由が見出されるわけである。

ところで、あいさつ行動は、このように人間にとって普遍・一般的な行動であるから、その表現には一部強固な類型性が存在する。したがって、ある集団・社会のあいさつ行動を記述することで、その集団・社会の構造や生活文化の特徴をうかがうことができるため、あいさつ行動は、社会心理学・社会言語学などの分野において早くから注目されてきた。[1] しかし、その類型性の一方で、あいさつには、民族・時代を異にする場合はもちろん、同じ共時的集団・社会においても、場・状況・個人の関係・意図に応じて、その表現過程で、類型が変容させられたり、あるいは、類型は大まかな内容・構成を規定するだけで、細部は諸条件に沿って構築されていくなどの形で、個別的独創的に生成される自由性もかなりの程度存在している。つまり、あいさつは、人間一般の行動として他の集団・社会のあいさつと根源的な共通性をもちながらも、まずは、集団や社会の個々のありように対応して、個々の集団・社会における個別の様相をも併せ持つ社会生活面での文化なのであり、さらに、ある個別的な環境において生活する個人においては、他人のあいさつと、同じ集団の構成員として共通のコミュニケーションのコードを持ちながらも、彼のその場の人間関係や状況・意図等に応じて創造的に択びとっていく一回的な個性的表現でもあるわけである。

この類型性と自由性の、個々のあいさつ表現における関連・融合・変容の様態はおそらく個々まちまちで、あいさつ全体を俯瞰しても一様に論定しがたいものと推量されるが、こうした複層的構造と独創的性格をもつ個々のあいさつ表現の具体を分析していけば、あいさつ行為者のその時点における相手との人間関係や自己のあいさつ行動に対する意識・意図が測定され、さらには、あいさつ行動後のコ

ミュニケーション的効果をも観察できるわけである。

私は、このような視点から、「挨拶のことばと源氏物語――其の一、竹取物語と宇津保物語と枕草子から――」（佛教大学『文学部論集』第八十四号、二〇〇〇年三月。以下「前稿」とよぶ）という拙論において、中古の古典文学作品におけるあいさつ表現に注目し、具体的には竹取物語と宇津保物語と枕草子におけるあいさつのことばを整理しつつ、それらの表現がそれぞれの作品の構成や文学性とどのように関わっているかを考えてみた。あいさつ表現が、その場の人間関係を映し出すと同時に、そこからその人間関係をコントロールしようとする使用者の意図があぶり出され、それに基づく文学的な面白みが醸成されてくるとともに、そのあいさつ表現の発想・仕方・類型に、作中人物の個性・作品の性格・時代の生活文化の質が見えてくるのではないかと予想したからである。

前稿はいまだ試行錯誤的で、用例の遺漏を含め内容的に十分でない点もあった。それらについては今後補足等を行っていきたいと思っているが、将来的には源氏物語における人間関係のありようと、コミュニケーション・作品構築の方法を、あいさつ表現を介して考えてみたいと思っている。だが、そこに至るまでに、あいさつ表現の多様性と種々相が、それ自体の歴史としても、また文学史的な問題意識の上からも、源氏物語に先行し、日本語によるあいさつ表現が仮名によって具体的に書き止められている伊勢物語・蜻蛉日記などの作品をたどることにおいて見通されている必要があるだろう。いうまでもなく源氏物語は、このようなエポック・メイキングな作品の精神と表現をわがものとし、その流れの上に開花している作品なのであるから。

本稿では、とりあえずその一環として、伊勢物語におけるあいさつ表現の実態と位相を、作中人物の発する散文的な会話のことばを中心に分析しておこうと思う。伊勢物語におけるあいさつ表現は、和歌によるあいさつ表現を除外して考えることはできないが、今は、字数の制限もあり、伊勢物語における和歌によるあいさつ表現については、本稿の内容と関連づけながら、なお別稿で検討することにしたい。

また、あいさつ行動は、言語のみならず、表情や身振りによってもなされるのであるが、対象作品の性格上、それへの特別の言及がなければ、表情や身振りによるあいさつ表現の具体は作品において明確でないので、分析の対象はいきおい言語的な表現に傾くことを申し添えておく。

## 二

伊勢物語におけるあいさつ表現を見ると、人間関係の折

り目に詠まれる贈答を中心とした和歌にあいさつ性の見られる例が多いが、作中人物の発する散文的な会話のことばでは、その例は多くない。具体的なあいさつのことばと認められるのは次の五例ぐらいである。[2]

①男、「京へなむまかる」とて、

栗原のあれはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

と言へりければ、よろこぼひて、「思ひけらし」とぞ言ひをりける」。（十四段）

②（地方へ下向した親友から）月日経て、おこせたる文に、「あさましく、対面せで、月日の経にけること。忘れやし給ひにけむと、いたく思ひわびてなむはべる。世の中の人の心は、目離るれば忘れぬべきものにこそあめれ」と言へりければ、よみてやる、

目離るともおもほえなくに忘らるる時しなければおもかげにたつ（四十六段）

③（藤原常行が山科の禅師の親王に）まうでたまうて、「年ごろ、よそには仕うまつれど、近くはいまだ仕うまつらず、今宵はここにさぶらはむ」と申したまふ。親王よろこびたまうて、夜のおましの設けせさせ給ふ。（七十八段）

④男（藤原敏行）、（あてなる男のもとにいる女に）文おこせたり。得てのちのことなりけり。「雨の降りぬべきになむ、見わづらひはべる。身さいはひあらば、この雨は降らじ」と言へりければ、例の、（あてなる）男、女にかはりてよみてやらす、

数々に思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる（百七段）

⑤男、久しく音もせで、「忘るる心もなし。参り来む」と言へりければ、

玉かづらはふ木あまたになりぬれば絶えぬ心のうれしげもなし（百十八段）

物語では、各例、あいさつについてこれだけの表記しか存在しないが、現実のあいさつの場面を想定してみると、これらの表記されているあいさつだけで、その場でのあいさつの全てがまかなわれたとは考えにくい。①②④⑤における傍線部の前後に普通はもっとことばが付加されたかもしれないし、③では、当然使者の案内があったはずであるうえ、常行が宮に対面して、傍線部に先立って何か述べていたとしてもおかしくはない、却ってそのほうが自然であろう。つまり当然のことながら伊勢物語は、文学作品として作品の構成に必要と認めた詞しか記しとめていないのである。だが、これらにみえる辞去・無沙汰・不参のあいさつとして、また、さほど親密でもない人への来訪のあいさ

つとして、これらが肝要な部分であったろうことは、相手との離別、あるいは接触の再開・開始・回避の意向とその理由（離別の場合は哀惜の情）を述べていることからも認めておいてよいだろう。もっとも、①の場合は、「京へなむまかる」のみでは惜別の情・再会の期待等人間関係の構築・維持に強く関わろうとする表現の力が十分とは思われず、単なる通知のレベルと差がつきにくいが、これは、「とて」によって「栗原のあれはの松の……」の歌と一体となることでやはりあいさつになっているのである。また、②においては、接触再開に際して、理由あるいは自己の非に替えて、「忘れやし給にけむ」と、消極的ながら相手の変心を疑いなじっているのが注意される。無沙汰のあいさつ等で相手をなじったり、皮肉を言ったりするのは、基本的に男女の関係で多く見られ、この段の基調が、同性間の友情を、恋情的に仕立てていることと関わっている。[3] さらに④では、雨のため女の家に行けないとは言い切っていないが、女の反応を見ながら自分の意向をほのめかしたものとして、あいさつと見なしてよかろう。

ところで、これらのあいさつ表現を有する段が存在する一方で、伊勢物語にはあいさつのなされた状況の存在が推測されるにも拘わらず、あいさつ表現の存在しない章段がある。

⑥（女は別の男に）「今宵あはむ」と契りたりけるに、この（元の）男来たりけり。「この戸、あけたまへ」とたたきけれど、あけで、歌をなむ、よみて、いだしたりける。　（二十四段）

⑦（女が）死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」と言ひけるを、親聞きつけて、泣く泣く（男に）告げたりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、　（四十五段）

⑧（三郎は）こと人はいとなさけなし、いかでこの在五中将にあはせてしがなと思ふ心あり。狩しありきけるに行きあひて、道にて馬の口をとりて、「かうかうなむ思ふ」と言ひければ、あはれがりて、来て寝にけり。　（六十三段）

⑨その男、伊勢の国に狩の使に行きけるに、かの伊勢の斎宮なりける人の親、「常の使よりは、この人よくいたはれ」といひやれりければ、親の言なりければ、いとねむごろにいたはりけり。あしたには狩にいだしたてやり、夕さりは帰りつつ、そこに来させけり。かくて、ねむごろにいたづきけり。　（六十九段）

⑥は、「かたゐなか」に住んで男が「宮仕へ」に京へ出るような階級の男女の物語で、このような階級の男女がどの程度のあいさつを習慣的に交わすものか不明な点もある

が、「宮仕へ」に出て「三年来」なかった男が、再訪の際に女に全くあいさつせずいきなり「この戸あけたまへ」といったとは常識的に考えにくい。まずは、「俺だ。今帰って来たぞ」程度のあいさつは先行していたはずなのに、語りはそれを略す[4]。そして、もとの男の再訪にもかかわらず、戸を開けることもなく、男を家に入れずに男と会わない女の意志と事情を歌で示していく。『『この戸、あけたまへ』とたたきけれど、あけで」という部分が、男に対する女の態度を行動で明らかにし、歌につなげていく描写として省略されずに示されたのとは対照的である。

⑦では、女の親と男との具体的関係は不明であるが、ともに貴族階級に属する者であるのは「人のむすめのかしづく」という親娘に対する語り手の待遇や、「宵は遊びをりて」という男の態度からもうかがえる。ならば、初対面であればなおさらだが、面識がある関係でも男と言葉を交わしたいと願っていた危篤状態の娘の意向を伝える親にとって当の男への丁重なあいさつは欠かせないはずだ。だが、語りではあいさつに触れず、用向きのみ「告げたりければ」と言及して、直ちに「まどひ来」る男の訪問に進む。緊迫した場に、そして男の娘に対する即時の態度に、間延びするあいさつへの言及は不要なのだろう。

⑧も同様。「この在五中将にあはせてしがなと思ふ心あり」の「この」の用法や「道にて馬の口をとりて」の動作から、『童子問』をはじめとして、在五中将を三郎の「主人」とする見解があるが、三郎が家臣であるなら家臣としての立場から、そうでないなら中将との身分差や面識の有無を考慮した現状の人間関係から、これから「百年に一年たらぬつくも髪」である母の男になってほしいと慈悲にも近い施しを中将に請おうとしているのだから、三郎による中将への丁重なあいさつのことばがあってしかるべきである（「道にて馬の口をとりて」の動作があいさつの態度だとしても）。だが、語りはあいさつのことばに触れず、三郎の意向が過不足なく伝わるべく「かうかうなむ思ふ」の語句だけを示して、直ちに中将の来訪に続ける。話の展開に必要なこと、すなわち中将に依頼しようとした事柄のみを記すに止めたのである。

⑨でも、伊勢滞在の斎宮と京からの勅使との間に、直接言葉は交わさずとも、来訪に際して正式のあいさつは交わされたはずだが、それには触れず、替わりに、親の言以上に「いとねむごろにいたは」った斎宮の接待ぶりを述べて、それにより男が「われて、あはむ」と言う心情にまで至ることを述べる。

つまり、これらの語りでは、その段の物語の展開に必要な当事者間の心情を構築するコミュニケーション行為につ

いては略さず触れるが、あったはずのあいさつ行為は物語の展開と心情構築に不必要であると認めて省いたと考えられるのである。

なお、九段にも存在してもよいはずのあいさつ行為への言及がなされていない箇所がある。

⑩宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蔦、かへでは茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道は、いかでかいまする」と言ふを見れば、見し人なり。京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。

（九段）

ここでは、男と修行者は、男が修行者をかつて京で「見し人」であった関係ではあっても、修行者が「かかる道は、いかでかいまする」と言っているところからすると、相互に東国を旅していることを知らずにおり、消息を入れて近況をやり取りするほどの親しい間柄ではなさそうである。とすると、「かかる道はいかでかいまする」ということばは、修行者からの最初の発話とすると、宇津の山道という予想外の場所（宇津の山道が間道であったことも加わっていよう）で予想外の京人と出会った驚きを、男の側の「……と言ふを見れば、見し人なり」という行文の緊張感ともよく対応しつつ、表現しているといえようが、その場合には、その予想外の驚きのために、本来なら丁重に交わされるべき、呼びかけ・存在の確認から久々の出会いに対するあいさつのことばが、京における身分差意識とともに吹き飛ばされたということになる。これは⑥～⑨の例のように、あいさつがなされたはずなのにそれへの言及が省かれたというものではない。あいさつ自体が当事者によって忘れ去られたのだ。

しかし、そう理解せず、実際の発話は（もちろん創作とみなすべきだが）「かかる道は……」の文に先立って、「もし、誰々様ではいらっしゃらぬか。お久しうござります」など、呼びかけ等のことばがあったのに、⑥～⑨の例と同様、物語の展開と人物の心情の形成に必要ではないと判断されて、それへの言及が省かれたのだと全く考えられないわけでもない。だが、その場合でも、男の「『……』と言ふを見れば、見し人なり」という反応の示され方が、想定され先行する呼びかけ・あいさつのことばに十分余裕をもってなされたものとは受け取りにくいものなので、その先行する呼びかけ・あいさつのことばが存在したとしても、そのあいさつ自身も男に十分な心的態度を構築させるだけの余裕を与えないようなもの、つまり緊迫したごく短いものであったろうと想像される。するとこの場合でも、予想外の場所で予想外の京人と出会った驚きが強かったのであり、

その驚きにより直ちに、この東国のうらぶれた心象風景の中に京を持ち込み、京・女への懐旧の情を生成させるために、あいさつへの言及は略されたのだと思われる。

こうして、以上、あったはずのあいさつが言及されないのは、渡辺実氏が初段を分析されて、「伊勢物語が、歌の成立事情と、その歌を支えている主人公の精神状況とを軸に意味構造を作り、その構造の一部をなすべきもの以外は、すべて無用として捨て去った」（「いちはやき到達――伊勢物語――」『平安朝文章史』）と言われていることと軌を一にする。あいさつは、物語の構成・歌の理解に不必要と判断されたのである。

## 三

とすると、先の①～⑤の例で、その前後のことばの有無はともかく、あいさつことばが省略されずにきちんと示されていたということは、貴族生活の一般的なありようをただ無為に写しとったのではなく、逆に伊勢物語の書き方からすると、その言及が物語の展開に、段の核をなす歌の成立と理解にとって必要だと考えられたからであるに違いない。

例えば、①では、「京へなむまかる」の詞がなければ、歌、特に下句「都のつとに」は理解できなくなる。

また、②のあいさつは、主人公の男にとって、京での日常の日々「かた時さらずあひ思ひける」程であった「いとうるはしき友」が、「人の国へ」「いとあはれと思ひて別れて下っていった後、「月日経て、おこせたる文に」書いてあったものであった。「月日経て」の部分には「年月経て」などの異文も存在しないから（山田清市『伊勢物語　校本と研究』による）、これによると下向して年を越えぬ内、おそらく京での二人の関係から二、三箇月の内には送ってきた消息とみられるが、それでもこの「かた時さらずあひ思ひける」「いとうるはしき友」にとって京の男の顔を見ずに過ぎていった期間はやりきれない「月日」であったようだ。ここで文面には「あさましく、対面せで」とあるから、男と顔を合わせていないのは確かなのだが、消息文がこれ以前に通わなかったかどうかについては物語に言及がないので明確でない。ただ、本文に「人の国へ行きけるを、いとあはれと思ひて別れにけり。月日経て、おこせたる文に」とあって、別れとこの消息文の送付とが間を置かず語られているところからすると、下向以後最初に送られてきた消息文である印象が強い。だが、そうでなかったとしても、「月日経て、おこせたる文」のあいさつで、そのような状況下でのものとしてまず想定される、それまでの音信・消息の断絶を嘆くのでなく、「あさましく、対面せで」と

直対の空白をわざわざ嘆いたのは、いうまでもなく消息文に「忘れやし給にけむと、いたく思ひわびてなむはべる」とあるとおり、「世の中の人の心は、目離るれば忘れぬべきものにこそあめれ」という習いによって、自分が男に忘れ去られることに耐えられなかったからである。いずれにしてもこの友は、対面のない音信のみの交流の無力さを痛感していたのだろう。それだけ、この友は、文字を介してでなく、視覚と聴覚による直接的な交流が人と人との繋がりにおいて有する力を認識していたわけで、その自分の現在の気持ちがそのまま直対の空白を嘆くあいさつになっていた。つまり、この友が男に述べた②のあいさつはそのまま、自分の現在の心情なのであり、男に伝えたい核心のものであった。あいさつの内容がそのまま消息文の主旨なのである。そのことは、友のこの消息文「贈詞」に対する男の返歌「目離るともおもほえなくに忘らるる時しなければおもかげにたつ」が、友のあいさつを受けて「目離る」「忘る」「おもかげ（対面）」をよみ込み、友の心配を慰めていることからもあきらかである。したがって、この段において、友のあいさつは、物語と男の歌とを構成する最重要の要素であって、語りから除外することはできない。

③は、藤原常行が、安祥寺で行われた、妹の文徳天皇女御多可幾子の四十九日の法事の帰途、それまで特に親しい関係ではなかった山科の禅師の親王を訪れ、臣従の礼を申し出た時のあいさつである。このあいさつは、どのように七十八段の構成と歌とにかかわっているのか。物語はこの後、臣従の礼を形に表すため、常行が、「三条の大行幸」の時、「紀の国の千里の浜」から献上された石を、庭園好きの親王に献呈することにし、その石に右馬頭の作った歌を付けたと語っていく。その歌は「飽かねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ」というものである。親王に臣従する常行の堅く深い心は見せようがないので、不満だがこの献呈する岩でそれを代わりに示す、の意である。この歌もあいさつであるのだが、今は散文のあいさつを問題にしているので、その点は措いておくとして、歌の内容と関わっている物語の事柄は、親王に臣従する常行の真心と、それを表すために庭園好きの親王に名石を献呈したという二点である。

前者の臣従する心は③のあいさつで示されるわけだが、この段での常行の行動を、単に出家して世俗の力を持たない「淋しい境遇の親王を、おなぐさめ申そうという趣向」（渡辺実『伊勢物語』新潮日本古典集成）とだけ取っては不十分だろう。このあいさつで、常行は「年ごろよそには仕うまつれど」「近くはいまだ仕うまつらず」「今宵はここにさぶらはむ」と、親王に仕える事に三度言及し、また

「よそ」「近く」と「年ごろ」「今宵」と対比させながら、今夜の奉公の決意を語っているうえ、岩を献上する際にも「宮仕へのはじめに、ただなほやはあるべき」と、親王への臣従に言及し、段構成の中心に位置する、献上する岩に付する歌にも「色見えぬ心」と詠みこませて、臣従の誠意を見せる。つまり、常行の親王への臣従の誠意は、この段のテーマなのである。③のあいさつに対して山科の禅師の親王が、「親王よろこびたまうて、夜のおましの設けせさせ給ふ」と素直に反応したのも、こうした文脈の中で理解されなければならない。

常行がこのように、仁明天皇皇子人康親王と見なされる山科の禅師の親王に接近したのは、妹多可幾子生前の皇室・後宮をめぐる両者の政治的関係も意識されていたかもしれぬが[5]、物語的には、片桐洋一氏が言われるように、前七十七段で妹の法事の後、歌人たちに歌を献上させて「文芸的なパトロンの風格」のある常行と、「山科の宮に、滝落とし、水走らせなどして」「島このみ給」う親王という「文化に関心の深い二人」の出会い、「権力や富の推移転変によっても変わらぬ人の心、つまり風流の士の心を描く」（鑑賞日本古典文学第五巻『伊勢物語・大和物語』）ためであったと考えてよいであろう。三段後に語られる、一世源氏である河原の左大臣融をめぐる風流人の逸話と、それに続く終には出家することになる惟喬親王をめぐるグループの事跡と通底する基調がここに見いだせる。

したがって、常行がそれまで特に親しい関係でなかった親王に、こうした精神的交流を求めて近づくためには、出家したとは言え親王と臣下たる者との間に交わされるべき、人間関係を新たに築くための正式のあいさつが必要であった。物語はそれを、常行の発話として具体的に示しているのである。臣従すべき親王を、安祥寺の法事の帰途に訪問したというのは、渡辺氏も言われるように、「ある人の御曹司のまへの溝にするゑたりし」石を献上した事とともに、「思いつきめいた印象が強く禅師親王が気の毒な感じ」（前掲書『伊勢物語』）に一見もされるが、時代は後のもので、また状況も異なるが、源氏物語少女巻では、朱雀院で行われた放島の試みの際、光源氏も同行して冷泉帝が、「夜ふけぬれど、かかるついでに、大后の宮おはしますかたを、よきてとぶらひきこえさせたまはざらむも、情けなければ、かへさにわたらせたまふ」とあり、当の弘徽殿大后は待ち喜んで対面しているから、この訪問は必ずしも失礼には当たらなかったようだ。逆に疎遠な人にでも近所に来たらついでに顔を見せてあいさつしていくのが礼儀でさえあったようにみえる。「ある人の御曹司のまへの溝にすゑたりし」石も、「御曹司」とあるから家の婿など身分のある人の部

屋の前にしつらえてあった石で、時期的に実現しなかったが本来なら清和天皇にもお見せすべきものであったから、その石の献呈プランが仮に思いつきであったとしても、この石ならば失礼ともいえないだろう。「かへさ」の訪問や、千里の浜の石の献呈の意味をこのように理解するなら、常行の親王に対する誠意は一層深いものとなってくる。③のあいさつはそうした誠意の最初の表出であった。

後者の、庭園好きの親王に名石を献呈したという点については、もういうまでもないだろう。段のはじめに「その山科の宮に、滝落とし、水走らせなどして、おもしろくつくられたる」と語られて以来、造園は親王の風流心を表すものとして、常行が親王に接近する媒体をなし、また、彼に親王への臣従の真心の証として名石を献呈するアイディアを思い浮かばせることで、段構成の中心である歌を招き寄せているのである。

④でも、例の男が女に代わって詠んだ「数々に思ひ思はずと問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」の歌の要素は、地の文で示される「得てのちのこと」、結婚成立後の男女関係だという前提の外は、すべて敏行の不参の意向をほのめかす「雨の降りぬべきになむ、見わづらひはべる。身さいはひあらば、この雨は降らじ」という消息の内容を前提にしている。基本は訪問すべき時刻になったのに、障害となる雨がふっているということであるが、これらの状況は、そのまま、敏行のあいさつの詞から男の代作の歌に引き継がれている。そして、敏行が、雨が降るのは不運にも自分の意に反しているのであり、不参は自分の責任ではないと詞で主張したのに対して、代作した男は、この雨の中敏行が来るか来ないかで、自分への愛情の有無が判明すると、歌で応じた。このずらしは恋の贈答歌にみられる常套とも言うべきもので、結局、敏行のあいさつの詞は、男の代作した「答歌」と対応して内容的に「贈歌」に相当しているのである。つまり、敏行のあいさつの詞は男の代作歌が成立する前提であり、物語から消去しえない。

⑤の場合も同様である。地の文「男、久しく音もせで」が両者のやり取りの場の前提となり、男のあいさつ「忘るる心もなし。参り来む」が贈詞となって、答歌「玉かづらはふ木あまたになりぬれば絶えぬ心のうれしげもなし」を引き出している。「男、久しく音もせで」が「玉かづらはふ木あまたになりぬれば」に、「忘るる心もなし」が、「絶えぬ心」に、「参り来む」が「うれしげもなし」に、それぞれ対応している。百十八段でも歌にとってあいさつの詞を消去できない。

こうして、伊勢物語の散文の会話文でのあいさつ表現のさまを見てみると、本来あいさつが存在したはずの状況で

も歌の成立と表現にとって必要でなければ、あいさつ行為については言及も表現もなされず、歌の成立と表現にとって必要であれば、その範囲であいさつが具体的に示されているという事実を指摘できる。つまり、伊勢物語にとって散文のあいさつは、歌のためにあり、歌に奉仕・従属している、といえる。このことはもちろん、「『伊勢物語』の詞章はおおむね、物語の中核をなす和歌に向かって推移する求心的な文体を形成して」おり、そのことが「和歌の表現を極限的に効果的ならしめている点で、他の歌物語一般とも異なる」といわれる「『伊勢物語』独自の方法」（鈴木日出男「『伊勢物語』の和歌」『古代和歌史論』）に由来していると言ってよい。

## 四

しかし、一段の構造面で和歌に奉仕・従属しているとはいえ、これらの散文部分におけるあいさつの詞は、あいさつの詞として、形式的に和歌から自立して存在している。②④⑤のあいさつの詞は歌を伴わずそれだけで発話者のあいさつとして存在していたし、相手の歌を呼び起こしてそれと対立している。つまり贈答の答「歌」に対して贈「詞」でありえた。③も、常行のあいさつが、歌ではないが、「親王よろこびたまうて、夜のおましの設けせさせ給ふ」の反応を引きだしそれと対立している。歌と連続して同一人によるあいさつを構成している点で歌からの独立性の弱い①においても、文としては、「京へなむまかる」が自立し、「とて」を介して歌と対立している。

すると、これらのあいさつが、①においては歌と一体になりつつも文として自立していること、②④⑤においては贈「詞」として他者の歌と対立していること、そして③においては贈「詞」ですらなく、常行の詞は当の言語場において歌から全く独立していることの意味はどこにあるのだろうか。

まず①では、前述したように、詞のあいさつは、歌物語としての立場からすれば、歌のあいさつが出現する前提として（特に下句の「都のつとに」にとって）存在していた。だが、ともにあいさつであるとはいえ、両者は同一の内容ではない。詞が、「京へなむ」「まかる」という動作の質を伝えることで、離別の具体的な内容と決意を示しているのに対し、歌は、内容的に詞よりも先に進んで、その土地や女に対する気遣いの飾りの言葉として存在する。あいさつといっても詞と歌とで役割りを異にするのである。つまり、詞と歌が相手へ伝達されるものとして連続し一体的なものではあるが、詞はまず相手へ伝達すべき内容を具体的に説明的に述べており、歌はその上で自己の感慨を詠嘆的に表

出している、という内容と性格面での相違がある。[6] それが、①において詞が歌から形式的に自立している理由と見られる。

また、相手の答「歌」をひきだしている②④⑤の贈「詞」は、地の文の内容とともに答「歌」の成立する前提を構成していたわけだが、同じく歌の成立する前提をなしているといっても①の場合が同一人による同一の意図に基づく一つの事柄の発話的展開であったのに対し、②④⑤では、話線はつながるが、二者の間で交わされた別個の意図に基づく発話で、形式も散文と和歌とに異なっている。散文のあいさつに対する返事がなぜ和歌の形式を採ったかは重要な問題だが今は措いて、散文のあいさつは、①の場合と同じく、あいさつするにいたった事情を相手に対して説明的に具体的に述べている。このようなことは、和歌の場合にはどうなるか。これらと同じく辞去・復縁・不訪問のあいさつをみると、次のように相手の存在を和歌の中に直接取り込んで相手と表現的に直対している歌では散文の場合と同様に説明的だが、

⑪むかし、男、あづまへ行きけるに、友だちどもに道より言ひおこせける、

忘るなよほどは雲居になりぬとも空行く月のめぐりあふまで　（十一段）

⑫むかし、男、すずろに陸奥までまどひいにけり。京に、思ふ人に言ひやる、

波間より見ゆる小島のはまびさし久しくなりぬ君にあひ見で

「なにごとも、みなよくなりにけり」となむ言ひやりける。　（百十六段）

次例の歌のように、相手を「人」などと三人称化したりあるいは歌の表面から消去したりして二人称性を薄め、叙述の重心をいちだんと自己の心情の方へ移動させた場合は、あいさつとしての述べ方が相手から見て、散文の場合と比べて非説明的・間接的なものとなっている。

⑬いささかなることにつけて、世の中を憂しと思ひて、いでていなむと思ひて、かかる歌をなむ、よみて、ものに書きつけける。

いでていなば心かるしと言ひやせむ世のありさまを人は知らねば

とよみおきて、いでていにけり。　（二十一段）

⑭むかし、はかなくて絶えにける仲、なほや忘れざりけむ、女のもとより、

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつなほぞ恋しき

と言へりければ、……　（二十二段）

⑮御おくりして、とくいなむと思ふに、…つかはさざりけり。この馬の頭、心もとながりて、

枕とて草ひきむすぶこともせじ秋の夜とだに頼まれなくに

とよみける。　（八十三段）

⑯（秋に逢うと約束していながら妨害が入りかなわずに）歌をよみて、書きつけておこせたり。

秋かけて言ひしながらもあらなくに木の葉降りしくえにこそありけれ

と書き置きて、……　（九十六段）

つまり、②④⑤の散文のあいさつは、意図のみならず、形式面でも常に相手（受け手）をそのままの位置で表現の構造に組み込んで成立している。これは、あいさつが相手を意識したものゆえ当然のことであり、人間関係の維持・構築という機能に相応した表現といえる。それに対し、和歌では相手の存在が、一般により間接的なものとなっている。これは和歌のもつ抒情詩性・短詩性のために、詠歌主体の比重が強くなり、相手はその詠歌主体との関連で内容の中に招来される傾向が強いからだと思われる。よってあいさつの歌といっても、⑪⑫のように相手に直接詠みかけたり、相手の言動を直接取り込んでいるものでなければ、そのあいさつ性は散文の場合に比べて間接性を色濃くもつものになる。したがって、逆に言えば、②④⑤のようなあいさつの詞は、贈「詞」として、歌に関心が向けられる歌物語の中で、段の核となる歌を詠むことになる相手を意識して相手に直接的に向けられる筋合いのものであり、その結果、段の核となる歌を呼び起こして相手による自己中心的たりうる答「歌」に対立することになるわけである。ちなみに②④⑤における歌も、答「歌」として、贈「詞」の主体の比重に関わる二人称性を弱めて、詠主の側の主情性を強めている。

こうして、贈「詞」のあいさつは、形式面のみならず性格的にも答「歌」と対立している。

また、③では、常行のあいさつが、「親王よろこびたまうて、夜のおましの設けせさせ給ふ」の反応を引きだしそれと対立していた。ここでは、その反応が行動であることが重要だ。歌でないということは、歌が説明されるべき対象として段の中核に位置し緊密な構成を志向すべき歌物語にとって歌の比重の低下をもたらすゆゆしい事態であろう。（このあいさつの場で歌の詠まれた可能性を否定はできないが、物語としてここでは詠歌に全く言及されないことが重要である。）実際、この段では、このあいさつの詞の他に、詞がもう一つ、

⑰かの大将、いでてたばかりたまふやう、「宮仕へのは

じめに、ただなほやはあるべき。三条の大行幸せし時、紀の国の千里の浜にありける、いとおもしろき石奉れりき。大行幸ののち奉れりしかば、ある人の御曹司の前の溝にすゑたりしを、島好み給ふ君なり、この石を奉らむ」とのたまひて、　（七十八段）

とあり、「この石を奉」る際に付されたのが、この段にただ一首ある歌なのであるから、③のあいさつの詞は、歌との関連をさらに希薄にしている。

しかも、この段では、その歌「飽かねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ」の理解に直接関係のない要素が幾つも語られている。この歌の理解に必要な情報は、尊経閣文庫蔵『在中将集』の詞書に「いしのおかしきを人にたてまつりける」[7]とあるので、最低限この程度で十分なのであろうと思われる。これに加えるとしても、この段の内容を踏まえて、「昔、右大将藤原の常行といふ人いまそかりけり。いしのをかしきを、宮仕へのはじめに山科の禅師のみこにたてまつり給ふに、右の馬の頭なりける人の歌をなむ、つけて奉りける」程度で十分であったはずだ。

であるのに、同段では、これ以上の事柄、すなわち、常行が山科宮を訪れたのが女御多可幾子の四十九日の法事を安祥寺で済ませた帰途であったことを語って、女御多可幾子の法事を安祥寺で行った際の詠進について語った前七十七段に連続した段として読ませ、歌を添えた石を贈るにいたった事情を、常行が帰途に立ち寄れるように山科の禅師の親王が安祥寺の近隣に住んでいたこと、常行が親王に臣従を申し出るほど好意を抱いていたこと（その日京へ帰らず宿泊している）、親王が立て石を肝要とする庭園を好んだこと、贈る石が三条の大行幸の際、紀の国の千里の浜から献上された謂れあるもので、その後、ある人の御曹司の前の溝に据えられていたこと、贈る石につける当の歌の趣向として蒔絵の模様のように刻んだ青い苔を用いて表記したこと等を、歌の内容からはみ出してこまごまと語っている。まことに「歌の説明に要する以上に詳しく描い」（渡辺氏前掲書『伊勢物語』）ているのである。このように歌の理解に直接関わらない要素の多用は、一段における歌の比重を低め歌を核とした緊迫した構造を緩める結果になっている。つまり、一段の末尾を「飽かねども……」の歌に続けて「となむよめりける」と結ぶことで、かろうじてこの段は詠まれた歌の説明を目的とする歌物語の体裁を保っているが、実態は、歌から歌の詠まれた背景の説明を介してその背景自体に、歌を中核とする構造から歌をも含む構造へ、つまり次第に歌からストーリー性へと重心が移りつつあるのである。

こうした段における興味の変化の中で、③の詞のあいさつは、常行が親王と接近する口上を述べて石が親王に贈られる事情を語る文脈の中にある点で、「飽かねども……」の歌と全く無関係なわけではないが、先に見たごとく段末の「飽かねども……」の歌の理解にとって必ずしも現状の形態である必要はなく、かつ、その歌とももう一つの常行の詞を介することで一層疎遠の関係になっているし、また②④⑤のごとく贈「詞」として歌を呼び起こしたりもせず、それ自体は全く散文的な環境の中にあった。すると、このあいさつがこのように具体的に物語に示されている理由は、常行の親王への臣従の誠意が段のテーマとなり、その結果、歌に関連するいくつもの事柄が歌から自立して独自性を主張してくる中で、テーマに沿って親王に接近して臣従の意向を最初に伝えるこのあいさつ自体の存在、その口上のさま自体を示すためであったと考えられてくるだろう。あいさつ行為を表現することへの関心なのである。

このことは、たとえば、六段「あなや」・九段「はや舟に乗れ、日も暮れぬ」・六十二段「このありつる人たまへ」「などいらへもせぬ」・六十三段「よき男ぞいで来む」・六十五段「かかる君に仕うまつらで、宿世つたなく、悲しき事。この男にほだされて」・六十九段「常の使よりは、この人よくいたはれ」「われて、あはむ」・八十七段「いざ、この山の上にありといふ布引の滝、見にのぼらむ」・九十六段「かしこより人おこせば、これをやれ」「今こそは見め」など、この七十八段と同様に、段において歌が構造的求心力を弱め、いくつもの事柄が自立してストーリー性への興味を強めている段が、③のあいさつの詞と同じ形式、つまりその言語場において歌との関わりから自立している直接話法的発話を中に含んでいることとも呼応してくるであろう。

だが、③からうかがえるあいさつへの関心、あいさつの様を具体的に示そうとする態度は、実は和歌のあいさつと一体化している①を除いて、贈「詞」である②④⑤にも見いだすことが可能だ。というのは、②④⑤は答「歌」を引き出していることで作中の和歌との関わりが③よりも強いが、②④⑤の詞自体は、相手に向けて発せられた散文のみのあいさつという点で③と同機能のものなのであり、答「歌」の代わりに、散文の応答あるいは詠歌以外の行動が引き起こされれば、形式的には③と同様になるからである。しかも、これら②④⑤の散文のあいさつは、それ自体の表現として不足がないように、伊勢物語中の直接話法的発話の中でも、とくに③と同様に、具体的に丁寧に記されている点で共通する。

というのは、いま、石田譲二氏が角川文庫本『新版伊勢

物語』の本文に「会話の部分」（同書「凡例」）と認めて施された「　」を参考に、これらのあいさつの詞と同じく直接話法的な物語中の発話（一部書面の詞）を拾い出して、それら全五十五例を、単純に各例を構成する音節数（長音は二音節に、促音および表記されていない撥音は一音節に数えた）の多い順に、音節同数の場合は文節数（（　）内の数字）の多い順に挙げて見ると、②の四十六段が2位に、③の七十八段が5位に、④の百七段が11位に、⑤の百十八段が24位にと、いずれも上位に位置する。24位の⑤までを示す。

1、128（33）「宮仕へのはじめに、ただなほやはあるべき。三条の大行幸せし時、紀の国の千里の浜にありける、いとおもしろき石奉れりき。大行幸ののち奉れりしかば、ある人の御曹司の前の溝にすゑたりしを、島好み給ふ君なり、この石を奉らむ」　（七十八段）

2、79（18）②「あさましく、対面せで、月日の経にけること、忘れやし給ひにけむと、いたく思ひわびてなむはべる。世の中の人の心は、目離るれば忘れぬべきものにこそあめれ」　（四十六段）

3、57（18）「今はなにの心もなし。身に、かさも一つ二ついでたり。時もいと暑し。すこし秋風吹き立ちなむ時、かならずあはむ」　（九十六段）

4、55（14）「いとつらく、おのが聞こゆることをば、今までたまはねば、ことわりと思へど、なほ人をば恨みつべきものになむありける」　（九十四段）

5、41（9）③「年ごろ、よそには仕うまつれど、近くはいまだ仕うまつらず、今宵はここにさぶらはむ」　（七十八段）

6、40（9）「太政大臣の栄花のさかりにみまそかりて、藤氏のことに栄ゆるを思ひてよめる」　（百一段）

7、37（10）「交野を狩りて天の河のほとりにいたるを題にて、歌よみて、盃はさせ」　（八十二段）

7、37（10）「かかる君に仕うまつらで、宿世つたなく、かなしきこと。この男にほだされて」　（六十五段）

9、37（8）「いかでものごしに対面して、おぼつかなく思ひつめたること、すこしはるかさむ」（九十五段）

10、36（9）「かうかう、今はとてまかるを、なにごともいささかなることもえせで、つかはすこと」と書きて、　（十六段）

11、35（8）④「雨の降りぬべきになむ、見わづらひはべる。身さいはひあらば、この雨は降らじ」（百七段）

12、30（9）「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心をよめ」　（九段）

13、28（9）「いざ、この山の上にありといふ布引の滝、

見にのぼらむ」　（八十七段）
14、22（5）「女あるじにかはらけ取らせよ。さらずは飲まじ」　（六十段）
15、21（6）「涙のこぼるるに、目も見えず、ものも言はれず」　（六十二段）
16、19（6）「いとかたはなり。身もほろびなむ。かくなせそ」　（六十五段）
16、19（6）「常の使よりは、この人よくいたはれ」　（六十九段）
18、19（4）「これをただに奉らばすずろなるべし」　（七十八段）
19、18（6）「いかにせむ。わがかかる心やめたまへ」　（六十五段）
20、17（4）「聞こゆれば恥づかし。聞こえねば苦し」　（十三段）
21、16（5）「かしこより人おこせば、これをやれ」　（九十六段）
21、16（5）「今まで巻きて文箱に入れてあり」　（百七段）
23、15（5）「これは、色好むといふ好き者」　（六十一段）
24、15（4）⑤「忘るる心もなし。参り来む」　（百十八段）

ちなみに、和歌のあいさつと一体化している①の順位と下位の十一例については以下のとおりである。

42、8（2）①「京へなむ、まかる」　（十四段）
45、7（2）「今こそは見め」　（九十六段）
45、7（2）「都へいなむ」　（百十五段）
47、7（1）「忘れぬなめり」　（三十六段）
48、6（2）「かれはなにぞ」　（六段）
48、6（2）「今宵あはむ」　（二十四段）
48、6（2）「われてあはむ」　（六十九段）
51、6（1）「思ひけらし」　（十四段）
52、5（2）「穂拾はむ」　（五十八段）
53、4（1）「さればよ」　（二十二段）
54、3（1）「あなや」　（六段）
55、2（1）「来む」　（二十三段）

このように上位に来ている例の属している段を見ると（1位の詞も③と同じ七十八段に属する）、気づくことは、全てではないが、ストーリー性に傾く段の多いことである。九段・六十五段・六十九段・七十八段・八十二段・九十六段・百七段などである。ストーリー性に傾くということは、ストーリーの展開・話の具体的な内容に興味が移ることだ

から、そこに長い詞が登場してきても不思議ではない。しかしそれ以上にここで重要なことは、7位八十二段・12位九段の歌題の提示を除けば、上位に位置する詞は、自己の思考・心情の内容を自他に対して説明する表現がほとんどであるということである。②③④の位置する11位まででいえば、順に、石を献上する理由とその石の由来の説明、無沙汰のあいさつと忘却の詰りと疑い、逢瀬の承諾と延期理由の説明、相手を恨む理由の説明、臣従する理由を述べるあいさつ、疑義に対して詠歌の趣旨を解説、（歌題の提示）、逢瀬を迫る口説き、自己の境遇の述懐と理由の明示、自己の境遇の説明と訴え、訪問をためらう事情の説明とあいさつ、等である。つまり、自分の考えを相手（一部の例は自己）に説明して納得させようとする、自己陳述・自己主張的な詞が、ストーリー性への傾斜と結び付きつつ、伊勢物語の散文の発話において比較的多くの語を用いて省略されずに表現され、扱いに留意されていることがわかる。音節・文節数下位の発話に、感嘆文、推量・疑問・意志などの単純な内容の表現が多いのと対照的である。

だが、いまは直接話法的な受け手を意識した発話を分析の対象にしているわけだから、自己陳述・自己主張的な詞が多くの語を用いて表現されているということも、相手を意識して自己の思いや思考を説明し理解させようとすれば、それだけ用いる語句の量も増えてくることになり、文章においては当然のことかもしれない。つまり、7位八十二段・12位九段における歌題の提示のように、音節・文節数が多くても自己陳述・自己主張的というより単なる叙述が主であるものも存在しはするが、対人関係におけるコミュニケーションでは、相手に自分をわからせる自己説明の機会が多くなるのは自然のいきおいであろう。そのようなものが結果的に上位に来ているのである。その中でも、対人関係を特に意識して、人間関係の維持・構築を意図するあいさつの詞が、音節・文節数で上位に来るのは少しも不可思議ではない。

ただ注意すべきことは、これらのあいさつが「やあ」「じゃあ」「こんにちは」「さよなら」など単純な音声や形式的なことばを発して、相手の存在と相互の関係を確認することを中心的な目的とするような類でなく[8]、その場の状況と相互の関係に沿って発話される表現の自由度が高い非類型的なあいさつであることである。11位までに入る②③④は見て知られるごとくであるが、24位の⑤、42位の①においても、「参り来む」・「まかる」など常套的な語句が用いられているものの、それらはあいさつことばとしていまだ形式化はしておらず、言辞として実質的な意味を有しているうえに、⑤では「忘るる心もなし」というやはり自分

の気持ちを説明することばが併用されて②③④と同じ性格をもっているし、①では「京へなむ、まかる」があいさつの歌に連続して、歌のほうにあいさつの比重があるものの、全体であいさつの表現の型にはまりつつ個人的な内容をそこに盛り込んでいる。逆にいえば、このような自由度の高い非類型的で個別的なあいさつの詞であったから、音節・文節数の多い表現になったのだといえる。

このように、伊勢物語における散文のあいさつは、和歌と連続一体化している①は和歌によるあいさつの比重が重く、扱いを保留すべきなので、それを除けば、いずれも、自由度の高い個別的なあいさつの表現として、他の自己説明・自己主張的な散文の詞と同様に、物語の中でも言辞を割いてその様が写されているものなのである。

## 五

だが、あいさつを含めたこのような散文の発話は、伊勢物語全体の語りの姿勢において取り立てて重視されているものだともいいにくい。というのは主要な成立時期を遅らせながらも、伊勢物語と同じく和歌を重要な構成要素として持つ小話を集めて成り立っている大和物語における散文の発話を見てみると、伊勢物語以上に自己説明・自己主張的な内容をもち、かつそれのためにより多くの言辞が割かれているからである。いま、伊勢物語と同じように、直接話法的な散文の発話を、音節数、同音節数例は文節数の多い順に、伊勢物語で②③④が位置しえたのと同じ11位内までを挙げてみると以下のようである（引用は、日本古典文学全集本による）。

1、198（37）「おほせごとには、『かう帝もおはしまさず、睦まじく思し召しし人をかたみとおもふべきに、かく世に失せ隠れたまひにたれば、いとなむ悲しき。などか山林に行ひたまふとも、ここにだに消息ものたまはぬ。御里とありしところにも、音もしたまはざなれば、いとあはれになむなきわぶなる。いかなる御心にてかうは物したまふらむときこえよ』とてなむおほせられつる。ここかしこ尋ねたてまつりてなむ、まゐり来つる」といふ。（百六十八段）

2、166（37）「おほせごとかしこまりて承りぬ。帝かくれたまうて、かしこき御影にならひて、おはしまさぬ世にしばしあり経べき心ちもしはべらざりしかば、かかる山の末にこもりはべりて、死なむを期にてとおもひ給ふるを、まだなむかくあやしきことは、生き巡らひはべる。いとも畏くとはせ給へること。童べの侍ることはさらに忘れはべる時もはべらず」とて、（百六十八段）

3、110（32）「たれもみ心ざしの同じやうなれば、この幼き者なむ思ひわづらひにて侍る。今日いかにまれこの事をさだめてむ。あるは遠き所よりいまする人あり。あるはこゝながらそのいたつきかぎりなし。これもかれもいとほしきわざなり」（百四十七段）

4、99（26）「おのれはとてもかくても経なむ。女のかく若きほどにかくてあるなむ、いといとほしき。京にのぼり、宮仕へをもせよ。よろしきやうにもならば、われをもとぶらへ。おのれも人のごともならば、かならずたづねとぶらはむ」（百四十八段）

5、98（27）「この人かくなりにたるを、生きて世にあるものならば、今ひとたびあひみせたまへ。身をなげ死にたるものならば、その道成し給へ。さてなむ死にたりとも、この人のあらむやうを、夢にてもうつつにても聞き見せたまへ」と言ひて、（百六十八段）

6、84（17）「みだり心ちはまだおこたりはてねど、いとむつかしう心もとなく侍ればなむ参りつる。のちはしらねど、かくまではべること。まかりいでてあさてばかり参り来む。よきに奏したまへ」（百一段）

7、82（17）「いとあだに物したまふと聞きし人を、ありありてかくあひたてまつり給ひて、みずからこそいとまも障り給ふこともありとも、御文をだにたてまつりたまはぬ、心憂きこと」（百三段）

8、71（15）「はやう御ぐしおろしたまうてき。かかれば御達もきのふ今日いみじう泣きまどひたまふ。げすの心地にもいと胸痛くなむ。さばかりにはべりし御ぐしを」（百三段）

9、71（14）「御前に御あそびなどしたまへるを、からうじてなむきこえつれば、『たが物したまふならむ。いとあやしきこと。たしかにとひたてまつりて来』となむのたまひつる」（百七十一段）

10、62（17）「玉淵はいとらうありて、歌などよくよみき。この鳥飼といふ題をよくつかうまつりたらむにしたがひて、まことの子とはおもほさむ」（百四十六段）

11、61（14）「いとやすきことなり。そもそもかくきこえつぎたらむ人をば忘れたまふまじや。いとあはれに夜更けて人少なにてものしたまふかな」（百七十一段）

これらは、伊勢物語の第1位が音節数128、文節数33、以下、第11位が音節数35、文節数8であったのと比べると、それの一倍半から二倍近い量である。伊勢物語11位に相当する量を持つ例は、大和物語では、第41位（音節数35、文節数9、百六十八段）と順位が大幅に下がる。直接話法的発話の例自体も、伊勢物語の五十五例に対して大和物語では二百五例と、三倍強に及び、一段中に現れる発話の数も、

大和物語では、百四十八段の芦刈説話で二十五例、百六十八段良少将出家譚で二十例と、多数にのぼるのに対し、伊勢物語では、六十二段の四例、六十五段・九十六段の三例が多い部類である。伊勢物語（百二十五段まで）と大和物語の本文の量が、似たような組み方をしている日本古典文学全集本の頁数でおよそ一・六倍強と、大和物語の方が多いことを勘案しても、これらの数値は散文的な発話の量が、大和物語において伊勢物語以上に多いことを示している。量のみならず、質も実は大和物語の方が挙例のごとく、伊勢物語以上に委曲を尽くして自己の思い・考えを聞き手の存在を考慮しつつ述べており、生々しいあいさつの詞も1位、2位、3位と伊勢物語以上に上位に位置する。だから、あいさつを含めた自己説明的な散文の発話は、伊勢物語において取り立てて重視されているわけでもないのである。

こうした事実は、同じく歌物語として括られながらも、前半の世俗説話、後半の伝説類の如何にかかわらず、大和物語の方が伊勢物語よりはるかに饒舌でその具体的描写やストーリー展開に強い関心を抱いていることを示している。逆にいえば、伊勢物語は、まだ歌に縛られている。歌が一段の中で重要な地位を占め、散文の発話も和歌から中々自由になれずにいる。[9] これまで見てきたごとく、伊勢物語における散文によるあいさつの詞が、あいさつの和歌に連続してそれと一体になりながらも、独自のあいさつの役割を果たしている①から、贈「詞」として答「歌」を引き出すことで和歌との関わりをもちながらも、自身は答「歌」の主体とは異なる言語主体による散文のあいさつとしての自立性を有している②④⑤、さらに段の構成要素として、歌との間接的な関わりを保ちながらも、贈「詞」としての役割ももたず、和歌とは直接呼応せずに散文的な環境の中で存在している③へと移る中で、次第に和歌からの自立性を強めているといっても、結局は和歌と一体、贈「詞」として答「歌」と対応、といった具合に和歌と関わることの方が一般的で基本だったのである。このことは、あいさつの詞を含めた伊勢物語における散文の発話全体についてもいえる。そうした歌の力学内での散文による自己説明、自己主張なのであった。

所詮、伊勢物語の会話における散文のあいさつは五例、散文の発話全五十五例の中においても少数としか言いえない。今後、稿を改めて述べるように、伊勢物語における主要なあいさつ、人間関係のコミュニケーションのほとんどは和歌によって担われている。和歌抜きにして伊勢物語は語れない。ただ、散文によるあいさつの立場で言うならば、そしてそれをも含む散文の会話機能の名誉のために言うならば、歌によって主要なコミュニケーションの職務が担わ

れている物語、あるいは歌のもつコミュニケーションの諸相を映し集めた物語の中で、そうした和歌の引力にひかれながらも、その力に対抗し逃れでて自由になろうとするかのように、多くの散文のことばを用いて開陳されていたのが、あいさつの場合でいうならば、仲を引き裂かれた特別の親友に対して抱いた猜疑と恨み、女を訪れえぬ責任を不可抗力のものとして自己から放擲しつつ自己の誠意を証せんとする試み、出家して既に世俗の力を喪失している親王への風流を媒介とした臣従の心寄せ、という当時においても決して目馴れたものであったとはいえぬであろう、あまりに個別的な個人の心情を中心としたものであった。これらが和歌で表現されなかったことの意味は十分考えられねばならぬが、それを成し遂げたのが、散文であったという事実も、それ以上に重々しい。散文の力は仮名文の初期から健在であったというべきであろう。

〈注〉

(1) 国文学の周辺ではこれらの分野の成果も取り入れて、次のような雑誌特集がある。『言語生活』一九六号、昭和43年1月、『言語』第10巻第4号、昭和56年4月、『あいさつと言葉』(「ことば」シリーズ14、文化庁)、昭和56年4月、『言語生活』三六三号、昭和57年3月、『日本語学』第4巻8号、昭和60年8月、『国文学』第44巻6号、平成11年5月、など。

(2) 伊勢物語の引用は、『新版伊勢物語』(角川日本古典文庫)によった。

なお、作中人物の発する散文の会話ことばではあるが、次のようなものは、あいさつと認めなかった。

㋐女の仕うまつるを、常に見かはして、(男)よばひわたりけり。「いかでものごしに対面して、おぼつかなく思ひつめたること、すこしはるかさむ」と言ひければ、

(九十五段)

㋑女、身にかさ一つ二ついできにけり。女言ひおこせたる。「今はなにの心もなし。身に、かさも一つ二ついでたり。時もいと暑し。すこし秋風吹き立ちなむ時、かならずあはむ」と言へりけり。

(九十六段)

㋒陸奥にて、男、女、住みけり。男、「都へいなむ」と言ふ。この女いとかなしうて、馬のはなむけをだにせむとて、

(百十五段)

㋐は、「よばひわたりけり」とあるように、求愛しつづけて送った幾つもの詞が一連のものと捉えられていて、その連続性ゆえ相手との接触におけるあいさつのもつ新規性・再会性が認めがたい。㋑も、直前に「(男)女をとかく言ふこと月日経にけり。石木にしあらねば、心苦しとや思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり」とあって、㋐と同じ事情のもの。㋒の「都へいなむ」は辞去のあいさつのようにみえるが、その後に間をおいて女によって馬のはなむけがなされ、「おきのゐて身をやくよりも……」の歌が詠まれているから、歌とそれの詠まれた場があいさつ的なのであって、「都へいなむ」には離別に際しての惜別の情も特に表明されていないこともあり、男の単なる意思表示と解される。あるいは、この段の

焦点が残される女の悲しみとその歌にあるので、なされたであろう男の辞去のあいさつ・惜別の情の表出（詞・歌）は段の焦点をぼかさないために省略されたともみなされる。

(3) 伊勢物語では、十七段に同様の状況が、「年ごろおとづれざりける人の、桜のさかりに見に来たりければ、あるじ、あだなりと名にこそ立てれ桜花年にまれなる人も待ちけり」とあり、この状況も関わって、ここの「あるじ」が同性か異性か見解が分かれている。男女間の会話のあいさつにおける相手への詰り・皮肉・当てこすりなど攻撃的要素の存在する例としては、前稿第三章で宇津保物語のものを示してある。

(4) 貴族階級の男性が宮中より帰宅した際のものだが、宇津保物語沖つ白波に「ただ今なむまかでつる」というのがある。前稿参照。

(5) 森本茂『伊勢物語全釈』三四〇頁。なお、中野まゆみ氏は、「多賀幾子」を文徳天皇女御、藤原順子の妹、古子ではないかとされる（伊勢物語七十七段『安祥寺での多賀幾子法要』存疑――『田邑帝の女御』は藤原古子か――」『国文学研究』一〇八、平成四年十月）。

(6) この、詞と歌の機能の相違ということについては、山口明穂氏が、ほぼ同様の見解を散文の表現と韻文の表現との相違という点から、前者は説明的・描写的、後者は感動的・主情的という言葉で述べられている（「言語生活としての和歌」『国文学』平成元年十一月号）が、①と同様に同一人によって詞から歌が連続的に詠まれている伊勢物語中に存在する他の三例からも、同様の相違が裏付けられる。

㋓思ひわびて、ねむごろにあひ語らひける友だちのもとに、「かうかう、今はとてまかるを、なにごともいささかなることもえせで、つかはすこと」と書きて、奥に、

　手を折りてあひ見しことをかぞふれば十といひつつ四つは経にけり

かの友だち、これを見て、いとあはれと思ひて、……

（十六段）

㋔男、「われをば知らずや」とて、

　いにしへのにほひはいづら桜花こけるからともなりにけるかな

と言ふを、いと恥づかしと思ひて、いらへもせでゐたるを、……

（六十二段）

㋕かの男、「いとつらく、おのが聞こゆることをば、今までたまはねば、ことわりと思へど、なほ人をば恨みつべきものになむありける」とて、ろうじてよみてやれりける、時は秋になむありける。

　秋の夜は春日忘るるものなれや霞に霧や千重まさるらむ

となむよめりける。

（九十四段）

これらはいずれも、詞と歌が相手へ伝達されるものとして連続し一体的なものであるのに、詞はまず相手へ伝達すべき内容を具体的に説明的に述べており、歌はその上で自己の感慨を詠嘆的に表出している、という内容と性格面での相違がある。この詠嘆性は和歌が和歌である所以であり、和歌が単なる会話の言葉でないことを示している。

なお、同一人によって詞から歌が連続的に発せられている例には、もう一例次のものがあるが、これは詞がいわゆる独話で、続く歌も、この独話に内容的に連続するのではなく、独話の前に示されている他人からの贈歌に対応する答歌とし

て存在しているので、性格が異なる。

㊥女のもとより、

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつなほぞ恋しき

と言へりければ、「さればよ」と言ひて、男、

あひ見ては心ひとつをかはしまの水の流れて絶えじとぞ思ふ

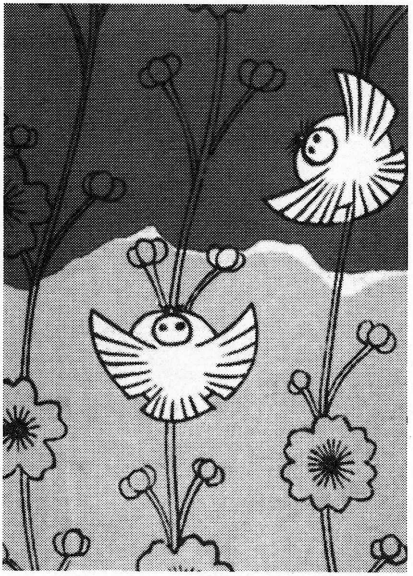
とは言ひけれど、その夜いにけり。（二十二段）

（7）引用は『私家集大成中古Ⅰ』による。

（8）もっとも、当時においてあいさつことばとして形式化していると見られる言辞は文献的にそう多く拾えない。前稿に例を挙げてある「もの申す」「久しくもなりにけるかな」「いま来むよ」なども、本来の語義を十分保有していると思われる。ただ用いられる状況がかなり固定しており、用法として類型的なので、そこに形式的なあいさつ語化へのきざしを認めてはおけるだろう。ちなみに大和物語にも別れに際して「大きになり給はむほどに参り来む」（百六十九段）という例がある。

なお、同じ「（参り）来む」という形ではあるが、伊勢物語にみえる「むかし、男、久しく音もせで、『忘るる心もなし。参り来む』と言へりければ」（百十八段）や、「からうして、大和人、『来む』と言へり。よろこびて待つに」（二十三段）は、これらと同類に扱えない。これらは、そのような辞去時のあいさつではなく、別居中の男が女に訪問の意思を伝える言辞である。これらが類型的・形式的なあいさつことば化しておらず、実質的な意味を有して用いられていることは、これらの言辞に相手が詠歌や待つという行動で反応していることからも知られる。百十八段の場合は発話全体で再会の意志を伝えるあいさつになっているのであり、「参り来む」を含め発話全体が言辞として実質的な意味を持つあいさつであるから、相手による詠歌という個別的で明確な反応があるのである。

（9）たとえば、伊勢物語と大和物語とで、共通する歌をもつ段〔（　）内は大和物語〕の語りの姿勢を比較してみると、二十三段（百四十九段）を除いて伊勢物語での「男」を大和物語では「在中将」とすることをはじめ、内容も、五十一段（百六十三段）・五十二段（百六十四段）・九十九段（百六十六段）・百段（百六十二段）においては小異あるもののほとんど同じだが、二十三段（百四十九段）においては伊勢物語で歌が五首あったのが大和では一首に減って、その一首も伊勢物語では夫が改心する直接の契機であったのに、大和物語では沸騰した金椀の水にその地位を譲っている、三段・七十六段（百六十一段）も、伊勢物語では二段に分かれていたのに大和物語では二条の后の立場で一段に統合している、百二十五段（百六十五段）も、伊勢物語での辞世の歌の前に大和物語では弁の御息所との交渉が複合されている等、大和物語における世俗的関心の強さと和歌の地位の低下とが見てとれる。

〈付記〉

前稿に続いて、本稿が、「挨拶のことばと源氏物語――其の二――」に相当すべきこと、前稿以来の作業が、平成十一年度における上野の国内研修期間に始まることを、記し置く。